



Title	現代的ランドスケープと公共空間
Author(s)	佐藤, 紗良
Citation	a+a 美学研究. 2019, 13, p. 90-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90097
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

佐藤紗良

Sara Satoh

現代的ランドスケープと公共空間

「ランドスケープ」という語は日本語では「景觀」「風景」「景色」と訳される。ランドスケープは、自然の風景であったり、自然らしい都市の風景であったり、人々によって「自然」と認識されるような風景であるだろう^[1]。これは一八世紀に英国で発達した風景式庭園が「ランドスケープ・ガーデン」と呼ばれるようになり、「ランドスケープ」が風景論や庭園の意味論のイメージとして確立されたためである。A・J・ダウニング (Andrew Jackson Downing, 一八一五―一八五二) は、風景式庭園は芸術家が最上の自然美を統合することによって生まれ、洗練された精神を育てると述べる。ここでは風景式庭園は自然らしく作られる必要があり、その理想としてピクチャレスクが挙げられている^[2]。彼の文章からは、ランドスケープが自然美の賞賛と結びついているのが読み取れる。

ダウニングの時代はランドスケープ観のパラダイムシフトの過渡期であった。同時期から、「ランドスケープ」は都市論などにおいても使用されることが多くなり、「景觀」としてその定義の幅が広がる。実際にも、ニューヨークのセントラル・パーク (一八七三年開園) を設計したF・L・オルムステッド (Frederick Law Olmsted, 一八二一―一九〇三) が、歴史上初めて職名として「ランドスケープ・アーキテクト」を名乗ったことから、従来使用されていた「ランドスケープ・ガーデナー」などと区別して「ランドスケープ・デザイナー」やランドスケープ・アーキテクトといった職名が誕生した。それに付随して、ランドスケープの焦点が個人の庭園から公共的な風景デザインへと転じていく。一九一〇年には、現在も刊行中のアメリカのランドスケープ・アーキテクト雑誌、『ランドスケープ・アーキテクトチュア・マガジン』が創刊された。ランドスケープが都市スケールで論じられるようになった二〇〇〇年には「ランドスケープ・アーバニズム」という都市計画理論も確立しており^[3]、都市においてランドスケープ論の展開が時代の潮流となる。

都市計画にランドスケープが流入してきたのは、都市に視覚的效果や景観的特徴が求められるようになってきたからであり、都市の「粹」化とも言える。G・オスマン (Georges-Eugène Haussmann, 一八〇九―一八九一) のバリ改造計画に見られるように、都市計画の中で、その都市のシンボルともなるランドマークの設定とランドマーク同士の接続、歴史的建造物の利用、並木道、幾何学的構成、公共空間の設置などが重視され、与えられた秩序の枠内で都市は増殖していった。



圖
1

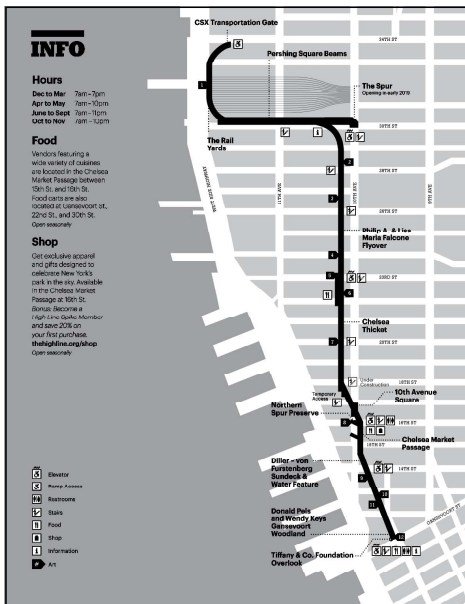


圖
2



3

建築物に挟まれた空中遊歩道の体をなすハイライン
筆者撮影(2015年1月)

ハイラインの観光図
(フレンズ・オブ・ハイライン公式HPより)

19世紀の貨物列車沿線の様子
(フレンズ・オブ・ハイライン公式HPより)

最初に始まったのは一九二四年で、こうした事故を減らすため道路から鉄道線路が除去されることとなる。一九二九年にニューヨークセントラル鉄道 (New York Central Railroad) とニューヨーク市、ニューヨーク州が、ウエストサイド開発計画に合意してハイラインの建設が決定した。この再開発で鉄道路線が全面高架となり、食品加工場や倉庫に直結する形で貨物を運ぶようになる。

その後主要な輸送手段がトラックとなったことにより貨物鉄道の稼働率は減少し、一九八〇年には全運行が廃止となる。ハイラインは放置され都市開発により一部撤去されたり、周辺地域が廃れて麻薬や風俗業が横行するなど、マンハッタン地区は荒んでいった。一九九九年にハイラインのオーナーであるCSX鉄道(貨物鉄道会社)がハイライン再利用の提案を受け入れたが、当時は多くの市民が、ハイラインは古い時代の産物で無用のものであると考えており、当時のR・ジュリアー

ランドスケープ・デザインは、アメリカの都市計画において重要な役割を果たしてきた。事実、ニューヨークでは前述したセントラル・パークや、ヘンリー・ハドソン・パークウェイ（一九三七年完成）のような公共空間が数多く生み出されている。本稿では、こうした公共空間の一つ、ニューヨークの空中公園であるハイラインに焦点を当て、構造的な特性及びコンセプトやコンテンツの選択などを分析し、そこから現代的ランドスケープを考察する。ハイラインは歴史的建造物の保存を目的の一つとしているので、まずハイライン建設に至る歴史を概観し、ハイラインの特徴をその歴史と照合する。さらにその特徴やコンセプトから、ハイラインがニューヨークの都市計画と現代のランドスケープ観に与えている影響を分析し、今後ランドスケープの分野がどのように広がっていくのかを示唆して本論を締めたい。

ハイラインの歴史的過程⁴⁾

ハイラインは、ニューヨーク市マンハッタン地区の西側にある高架貨物鉄道跡を再利用・再開発した空間で、現在は全長二・三キロメートルの線形空中公園として機能している。高層ビルの合間を縫う空中遊歩道と言えば分かり良いだらう⁵⁾。廃線をどのように再利用するかというアイデアコンペティションによって第一位を獲得した案に従って着手し、二〇一四年に全面的に完成した。現在はニューヨーク市の所有のもと、「フレンズ・オブ・ハイライン (Friends of the High Line)」という非営利団体が保存と運営を行っている。

ハイラインの歴史的過程^{〔4〕}

ここでまずハイライン建設にあたる歴史を概観したい。ハイラインの開始地点はミートパッキング地区 (Meatpacking District) である。この地域は古くから製肉工場や倉庫街として栄えており、一九世紀には貨物列車がマンハッタン南部に食品を運んでいた。しかし鉄道線路が一般道路と同じレベルを走っていたため、交通量の増加とともに交通事故が頻発し、一〇番街は「死の通り (Death Avenue)」と呼ばれるようになった^{〔図3〕}。ウエストサイドの改良計画が



図5

図5
15-16丁目のチェルシー・マーケット・パッセージ
(Chelsea Market Passage)
(フレンズ・オブ・ハイライン公式HPより)

スケープ・アーキテクチュアと都市景観設計に主眼を置く、ジェームズ・コーナー・フィールド・オペレーションズ (James Corner Field Operations) ②建築や舞台芸術を統合した学際的なデザインスタジオである、ディラー・スコフィ・ディオ・アンド・レンフロ (Diller Scofidio + Renfro / DS+R)、③オランダ出身の造園家かつランドスケープ・デザイナー、P・オウドルフ (Piet Oudolf) であった。特にジェームズ・コーナー・フィールド・オペレーションズは一九九八年に設立された若い組織で、チームに新しい風を吹き込んだ。デザインチームは「シンプルかつ野性のままに、ゆっくり静かに (Keep it Simple, Keep it Wild, Keep it Slow, and Keep it Quiet)」というフレーズを掲げて設計を行った。

ハイラインには大きく分けて三つの特徴が見られる。第一に、「地域の産業史を感じさせる構造物」というユニークさを備えている点である。古い線路跡や枕木が当時の面影を彷彿とさせるだけでなく、貨物鉄道時代、線路が工場や倉庫内部に直結していた様子を現在も見ることができる【図5】。現代の風景に溶け込みつつ場の記憶を未来に残すことで、ハイラインは過去と現在、そして未来をつなげる空間として機能している。興味深いことに、このハイラインプロジェクトは近隣の不動産開発を活性化させ、新しい建築物が相次いで建設されたり多くのアーティストが集まるなど、不穏な地域とされていた区画一帯が新しい商業の街、そしてアートの街として大きく生まれ変わった。ゲリーのIAC本社ビル、J・ヌーヴェル (Jean Nouvel) の高級コンドミニアム、R・ピアノ (Renzo Piano) 設計のホイットニー美術館の別館などがその最たる例である。ミートパッキングエリアの中心施設であるチェルシー・マーケットは、オレオクッキー工場を改造した室内型巨大マーケットで、配管や古いビル特有の汚れた様相を巧みに利用した独特なノスタルジー溢れる雰囲気や人を惹きつけている。ここも過去が現在につながる空間である。ハイラインの特徴の二番目として、優れた景観デザインを挙げることができる。ここでは(1)ハイライン上の景観、(2)ハイラインからの景観、(3)外からのハイラインの景観、のいずれにも考え抜かれた構成を指摘することができる。

図4 |
20世紀の見捨てられたハイライン
(フレンズ・オブ・ハイライン公式HPより)



図4

ニ市長 (Rudolph William Louis Giuliani) は二〇〇一年にハイライン解体手続き承認のサインをした。しかしこの野草が繁茂するランドスケープの美しさ【図4】に感化された近隣住民のJ・デイビッド (Joshua David) とR・ハモンド (Robert Hammond) がハイラインを公共空間として保護し再利用することを提唱し、フレンズ・オブ・ハイラインを創設。ハイラインのランドスケープ的美しさと歴史的価値は次第に認められ、市民二人によって開始された活動に心を動かされた多くのサポーターが本団体に投資するようになった。さらに二〇〇三年にはハイラインにかんする意見交換とフレンズ・オブ・ハイラインによる設計競技が行われ、三六以上の国から七十二ものアイデアが寄せられた。この企画は強く人々の関心を引き、その翌年には当時のM・ブルームバーグ市長 (Michael Rubens Bloomberg) と市議会がハイラインのため特別なゾーニングを承認し、公園として使用するという案が推し進められた。ここで選ばれたデザインチームによって、二〇〇九年に第一セクション (ガンゼヴォート・ストリート〜二〇丁目)、二〇一一年に第二セクション (二〇丁目〜三〇丁目)、二〇一四年に第三セクション (鉄道操車場。三〇丁目〜三四丁目、一〇番街〜二番街) が完成・公開され、現在はニューヨークに欠かすことのできない存在となっている。

ハイラインの特徴とコンセプト

ハイラインはバリのプロムナード・プランテやシカゴのミレニアム・パークといった前例に範を取り構想された。プロムナード・プランテは高架線跡を初めて公共空間とした事例であり、一九三三年に公開されている。ミレニアム・パークはF・ゲリー (Frank Owen Gehry) を中心に、二〇〇四年に仕上げられた、憩いの場と芸術の融合空間である。二〇〇四年にハイラインのデザインチームとして選ばれた主なメンバーは①ニューヨークを拠点とし、ランド



図6

図6
16-18丁目の10番街ビューポイント
(10th Avenue Square & Overlook)
筆者撮影(2015年1月)



図7

図7
ハイラインの開始地点とホイットニー美術館
(ホイットニー美術館公式HPより <https://whitney.org>)

付与されている。こうしたポイントは多く設置されており「図6」、見られる対象と見る対象が入れ替わりつつ視線が複雑に交錯する。さらには、下の景色のみならず、樹木や壁を低くして上空をも眺めることが可能のように設計されている区間もある。両側から高いビルに挟まれつつ、その中空をマンハッタンのスカイラインに向けて伸びる道は、己が立っている場所を揺るがすかのような一種の錯覚を生む。また、建物の三階で生活する人々と建物の外から目を合わせるといふ行為が可能なのは、地上九メートルの高さに作られたハイラインならではの。

(3) 外からのハイラインの景観

これは都市計画全体にハイラインを位置付けたときに理解できよう。例えばホイットニー美術館は、ハイラインの南端と呼応するよう類似の素材を使用してハイラインとの一体感を醸し出している「図7」。ハイラインをまたぐように作られたホテル、スタンダード・ハイ・ライン・NYCは、あたかも大きく開いた書物のようにハイラインを飲み込んでおり、その特徴的な姿は鳥瞰図的に上空から眺められてこそその魅力が発揮される。ハイラインを外から見るといふ視点がさらにハイラインの醍醐味を深めることとなる。

最後に、三番目の特徴として市民参加型の取り組みが挙げられる。種々の教育プログラム、ツアー、イベントがあり、ティーンやボランティアが多様な形で参加しているだけでなく、芸術・パフォーマンス活動に無料で場を提供している。公共空間が周辺地域の経済や人々の活動を活性化させるといふ点と、ハイライン自身が生き残っていくための十分な利益を生んでいるという点

(1) ハイライン上の景観

ハイラインでは、線路や枕木、鉄道の桁の骨組みなど、当時使用されていた資材をそのまま再利用しているものも多い。使用する資材については、「通常ニューヨーク市で規格が決められているが、「ハイラインは単なる公園ではなく、アートだ。」という市の「柔軟な判断により、規格外の床材などが認められている。つまり歴史をアートという手法によって蘇らせているのである。

その他のコンテナツとして植栽は重要である。多年草や樹木や花などが、適応力、色、季節ごとの変化など様々な要素を考慮して選定されている。特に高架が使用されなくなった後に線路上で自生していた植物は、ハイラインのルートとも言えるため、他の草花との相性が検証されつつ保存された。二〇一六年には約四〇〇種の異なる植物が育ち、「現在では五〇〇種類以上の植物や樹木が生い茂る緑の道となっている。植栽デザイン担当のオウドルフは、植物が自身の力で生きることができると持続可能な空間を目標としていたものの、現状ではボランティアとフルタイムの庭師によって常に植物の手入れがなされている。

また、ハイラインには多くの滞在型ベンチがある。劇場型ベンチ、階段式ベンチ、水流内に置かれたベンチ、サンデッキ、芝生、「オーバールック」と呼ばれるビューポイントなど、その場にとどまりたい、設置ツールを使用した、と思わせる特徴的な空間が随所に設けられている。これは、ハイライン設計の際にモデルにしたパリのプロムナード・ブランテにベンチが少ないという反省点を活かした結果であろう。屋台のような飲食店やアートも点在し、訪問者が滞在時間をフレキシブルに変動させられる工夫もなされている。

このように、ハイライン上は様々なコンテナツを使用し、各区間に異なるデザインが施されているため、その風景の変化によって訪問者を飽きさせることがないという特性を持つ。

(2) ハイラインからの景観

ハイラインには幾つかのビューポイントが設けられており、人々が遠く広がる風景や眼下の景色を見下ろす機能が

図8 |

ガンゼヴォート・ウッドランド、線路から木々が生えている様子
(フレンズ・オブ・ハイライン公式HPより)



図8

で、空間自体の持続可能性のモデルともなっているのである。

現代的な公共空間とランドスケープ

ハイラインの植栽を担当したオウドルフは、ハイラインには複数のアクセスポイントがありどこからでも庭園に入っていくことができるものの、ガンゼヴォート・ストリートの階段は開始地点として最もドラマティックな場所であると述べている^[7]。ここは「ガンゼヴォート・ウッドランド (Gansevoort Woodland)」と呼ばれ、一九八〇年代に冷凍倉庫だった場所をアパートに改造するため線路が遮断された箇所である^[8]。外観は道が唐突になくなっているように見えるが、それが意外性を生み、ホイットニー美術館との融合とともにこの区画の風物詩となつて上下の人々の視線を絡ませる。こうした仕掛けが各ポイントに設置されている公共空間は現代アートのようにもあり、他人同士が一瞬心を通わせる場として新しいコミュニティのあり方を提示している。

さらにこのガンゼヴォートの階段を登りきった先には文明と自然の渾然一体化が表現されている。ハイラインで最大の目玉とも言えるこの空間では線路から植物や木が生え出ており、都市にいながらにして雑木林に分け入るという体験を訪問者に提供するようデザインされている^[9]^[図8]。産業構造物として生み出されたという

歴史を後世に伝えること、そして野生植物を生かすことがそのまま体现されている空間である。

オウドルフは造園家であったW・ロビンソン (William Robinson, 一八三八―一九三五) の『ワイルド・ガーデン』(The Wild Garden, 1870) に影響を受けており、その指針はハイラインにも流れ込んでいる^[10]。ロビンソンの考えるワイルド・ガーデンとは、「在来種と外来種がともに共生する新たな野生を再創造」すること^[11]であり、郊外の「景観」の変化を想定して、外来種を庭そのものではなく林や野原に帰化させること^[12]であった。オウドルフ自身は、ロビンソンのワイルド・ガーデンを、「グローバルな植物の複合体」と理解しており、「いかなる状態でも繁茂することができる多年生植物の混合を企図していた」とする^[13]。確かにロビンソンは mixed border という単語を使用して「全ての庭はミックスボーダーであるべきだ」と述べており^[14]、それを受けてオウドルフは、人間が手を加えずとも持続可能な植物の自生空間をコンセプトに据えて植栽を行った^[15]。環境問題の深刻化を受けて、二〇世紀後半から謳われ始めた「サステイナビリティ」を改めて公共空間のコンセプトに位置付けるといふ指針もまた現代的ランドスケープ観の幕開けとなった。

さらに、ハイラインの遊歩道が「建築」、「ランドスケープ」、「都市」というそれぞれ異なるスケールを構成しているという点にも着目したい。例えばオウドルフが最もドラマティックな場所であると述べるガンゼヴォートに焦点を当てる。前章でハイラインの特徴として述べたように、後続の建築物はハイラインを意識した造りになっている。特にガンゼヴォートのホイットニー美術館はハイラインに向かって徐々にせり出すような形態になっており、物理的に距離が近いだけでなく、縦線多用したガラス張りの壁面とハイラインの鉄筋構造の統一感が秀逸である。さらにハイライン南端部に酷似したベランダを複数付随させることで、唐突に途切れているハイラインの違和感を吸収する役割を担っている^[図7]。建築物はハイラインに寄り添ったり飲み込んだりと様々な関係性を持ち、ハイラインは建築物の基盤となっている。

またこの遊歩道は中空にあるからこそ地域的ランドスケープを可視化し、訪問者自身をランドスケープの中に位置

図9 |

18-20番街のチェルシー・グラスランド (Chelsea grasslands)、背景にIAC本社など特徴的な建物を臨む
(フレンズ・オブ・ハイライン公式HPより)



図9

付けることを可能としている。そして人々の視線はハイラインを超えて上下左右に伸び、外の景色に対して意識が集中する。つまり人々は三次元的にマンハッタンのランドスケープを視認するのである。ガンゼヴォートのアクセスポイントには壁面を低くし、ガラスを使用しているため、「上から見下ろす」ことが意図されている。しかし「この唐突に途切れる建築物」はその形態によって下に位置する人が見上げる視線方向をも指向している。さらに都市スケールから見ると、ガンゼヴォートはガンゼヴォート・ストリートから始まる一つの巨大構造体の入口であり、訪問者を自然に「都市」の中へと同化させる役割を持つ。ハイラインは建築を際立たせ、都市やランドスケープを立体化させるためのツールとなつて街の景観を決定づけているのである^{〔16〕}〔図9〕。

不要な線路や車道をリメイクして公園に変えた例には前述のブロムナード・プランテの他にも二〇一七年に韓国のソウルに完成した「ソウルロ7017」などがあるが、前者はむしろ住民の居住スペースと一体化していると言える。ブリュージュルのバベルの塔を彷彿とさせるアバルトマン（集合住宅）を切断するかのように入歩道が延びる特徴的なデザインや、アバルトマンとの接合部分を持つなど、ブロムナード・プランテはあたかも居住スペース同士をつなぐ外廊下や中庭といった面持ちで周囲に溶け込む。また、線路の再利用というコンセプトが明確に可視化されておらず、囲われた空間のように一種の庭園芸術として作られている

部分もある。後者は運動スペースや当時の車道を一部残す箇所もあるが、歩行者の移動に使用するという機能的側面が強く見られる。遊歩道で街と街を連結させることによって、徒歩での移動をより容易にしているという点を鑑みると、必然的に観光・移動のための利用が主となることが窺える。植栽デザインも草花が訪問客から一定の距離を保って整然と植えられており、遊歩道としての側面が強い。

ここで重要なことは使用者がどのように公共空間に接することができるかということである。ハイラインは観光客や住民が多様な方法で空間を享受し、公共空間の運営・保存に参画している。それは空間やツール、残された産業構造物の使用方法が定められていないからであり、様々な参与方法を可能にするからである。これは能動的な空間、参与型の空間であると言える。しかしブロムナード・プランテやソウルロは比較的受動的な空間である。つまり、付与された機能や目的を持って作られたツールが、その通りに受容され得る。ここにハイラインとの違いがある。

こうした工業化時代の産物を活用した都市計画の有効性は現代において証明されてきている^{〔17〕}。北米では工業敷地の再利用に対して国際コンペティションが開かれ^{〔18〕}、公共空間と交通インフラの一体化を図った公園を造営するという計画が多くなっていると、ランドスケープ・アーキテクトのC・ウォルドハイム (Charles Waldheim) は考察している^{〔19〕}。ボストンのエメラルド・ネットワークス（二八〇年代）はオルムステッド及びパートナーのC・エリオット (Charles Eliot) による公園群だが、都市デザイン理論のJ・ティーム (Jacqueline Tatom) の研究によると、雨水と下水の氾濫解消を中心とした実用的側面から誕生したもので、当時から既に都市インフラに対するプログラムが構想され、公園の外側に、道路と新しい都市域が生み出されていた^{〔20〕}。オルムステッド自身は快適で美しい景観への配慮がなされた自動車専用道路を「パークウェイ (Parkway)」として提唱し公共空間と接合しようとしたが、現代に移行するにつれ、交通インフラ自体が公共空間の中に取り込まれるようになってきている。

ハイラインは交通インフラの整理に一役買っているだけでなく、保水、排水、通気の強化やヒートアイランド現象の減少にも力を入れるなど、環境問題を考慮に入れたエコロジーや植物の持続可能性と結びついている。植物学者のP・D・トレディチ (Peter Del Tredici) によると、都市環境の特性の一つは、インフラ建設・維持にともなう物理的な

混乱であり、土壌や排水状態の変化、及び建築物造営による土地の断片化が既存の植物群の生存を不安定なものにしている。特性のもう一つがヒートアイランド現象で、こちらも土壌品質などを変化させ、元来の植生に害を与えている^[21]。ハイラインはこのどちらの特性にも対処できるように構築されていると言える。近年、生態系を研究する「ランドスケープ・エコロジー」という分野が登場し、都市ランドスケープにおける持続可能性とエコロジーが取り上げられるようになっていく。また、一定状態にとどまることのない動植物や土地の様子を例に挙げ、B・ミリガン(Bret Milligan)は「ランドスケープ・マイグレーション」という語の使用を提唱した^[22]。こうした変化を受け、ランドスケープ・アーキテクトのR・ウェラー(Richard Weller)は、ランドスケープは「自然と文化のシステムの融合体」になってきたと構想している^[23]。ハイラインは、「自然と都市／文化」という一九世紀的対比構造から「自然と都市の融合」への移行、そしてランドスケープ・エコロジーといった現代的ランドスケープ観をそのまま体現している空間なのである。

以上のように、ハイラインでは、歴史と地域的特性、三次元的構成と視線誘導、能動型の空間、エコロジカルな問題への配慮、持続可能性、そして自然と都市の融和に焦点が置かれ、それがマンハッタンの都市ランドスケープを変容させてきたということが分かる。さらに、ハイラインは現在、デザイナーの手を離れて一般市民らによって運営されていると言っても過言ではない。ハイラインでは常に新しい企画が生み出され、刷新され続けている。それ自体で進化していく力。これこそが公共空間の持続可能性であり、ランドスケープの新しいモデルであると言える。

結びにかえて

セントラル・パークは「都市からの逃避」という意味においてランドスケープと都市を二項対立で捉え、都市にランドスケープを位置づけている典型的な例である。これに対して現代では、ランドスケープと都市を融和させ、イン

フラや交通手段と一体化させたり、エコロジーと結びつけてコンセプトが立てられようとしている。ハイラインはその最も先進的な例の一つであり、工業的なランドスケープをノスタルジックの象徴としている上で、都市との融和やエコロジーに主眼を置いている点が現代的である。二〇一〇年にはASLA (American Society of Landscape Architects^[24])によってハイラインの第一セクションが、二〇一三年には第二セクションが名誉賞を受賞した^[25]。講評では、公共スペースがビジネス空間を生み出すという経済的な点やコミュニティとして機能する点で持続可能性があると判断された。特に二〇一〇年には、都市インフラを自然が支配するというメランコリックな美しいデザイン、産業道具をレクリエーションのツールにした点、そしてエコロジーの面が評価されている^[26]。地域に与えたランドスケープ的影響のみならず、ボランティアや住民の力を活用した公園の運営管理手法、地域に与えた副次的効果によって、ハイラインは常に成功例として挙げられる。そして都市を特徴付けるといふ点で一九世紀以降のランドスケープと同様の役割を果たしつつも、様々な新しい可能性を付与し、新しいランドスケープ観を創出し続けているのである。

佐藤紗良(さとう・さくら)

京都市立芸術大学非常勤講師。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。専門領域は、歴史的建造物の修復をめぐる諸課題を中心とした建築・庭園・修復史。

註

- *1 | チャールズ・ウォルドハイム編著『ランドスケープ・アーバンイズム』、岡昌史訳(鹿島出版会、二〇一〇年)一七五頁。
- *2 | Andrew Jackson Downing, *A Treatise on the Theory and Practice of Landscape Gardening* (New York & London: Wiley and Putnam, 1841), 10.
- *3 | Brian Davis, and Thomas Oles, "From Architecture to Landscape," *Places Journal* (October 2014), (<https://placesjournal.org/article/from-architecture-to-landscape/>) 最終閲覧日 一二月四日。

- *4 フレンズ・オブ・ハイライン公式ホームページ (<https://www.thehighline.org>) 最終閲覧日二〇一四年四月。
- *5 自治体国際化協会ニューヨーク事務所「廃線を活用した都市公園開発——ニューヨーク・ハイライン公園の成功に学ぶ」“Clair Report”三九四号（二〇一四年五月）(<http://www.clair.or.jp/forum/pub/docs/394.pdf#search=%27ハイライン%27>)
- *6 Piet Oudolf and Rick Darke, *Gardens of the High Line: Elevating the nature of modern landscapes* (Timber Press, 2017), 28.
- *7 *Ibid.*, 42.
- *8 フレンズ・オブ・ハイライン公式ホームページ
- *9 Oudolf, 2017, 47.
- *10 *Ibid.*, 23-27.
- *11 橘セツ「庭園の中の野生と異文化」ウィリアム・ロビンソン『ワイルドガーデン』（1870）の思想と実践について「神戸山手大学紀要」二二号（二〇〇九年）一四一—一五六頁。橘は、ロビンソンが使用しているイラストから、ワイルド・ガーデンでは必要以上に人の手をかけないオーブンスペースが目指されているとしている。
- *12 新妻昭夫「ロビンソンの『ワイルド・ガーデン』とはどのような庭か？」『恵泉女学園大学園芸文化研究所報告…園芸文化』六号（二〇〇九年七月）一七〇—一九三頁。新妻は、ロビンソンがサザン鉄道沿線にてワイルド・ガーデンのアイデアを思いついたという興味深い内容も指摘している。
- *13 Oudolf, 2017, 23.
- *14 William Robinson, *The Wild Garden* (London: John Murray, 1870), 6. 注23に登場する Tredici は二〇一四年に「コスモポリタンな都市植生 (cosmopolitan urban vegetation)」というコンセプトを提示しているが、これもロビンソンの流れを汲むものであろう。
- *15 オルムステッドも『ワイルド・ガーデン』を所有し、そのコンセプトに影響を受けたことが知られている。
- *16 本文では触れていないが、極小単位のスケールとしてガンゼヴォート・ウッドランド自身を見ると、あまりに唐突に途切れているので、小さな衝撃をともなうアイキャッチ的役割を果たしていると言える。人を驚嘆させ注目させるという特徴は、一六世紀中頃から末頃にかけて流行したマニエリスムの驚異の美学とも類似する。
- *17 ウォルドハイム「二〇一〇年」四二頁。
- *18 同訳書、四五頁。
- *19 同訳書、四三頁。
- *20 同訳書、一九一—一九二頁。
- *21 Peter Del Tredici, “The Flora of the Future,” *Places Journal* (April 2014), (<https://placesjournal.org/article/the-flora-of-the-future/>)
- *22 Brett Milligan, “Landscape Migration,” *Places Journal* (June 2015), (<https://placesjournal.org/article/landscape-migration/>)

- *23 ウォルドハイム、二〇一〇年、七四頁。
- *24 米国ランドスケープ協会。米国に本部がある世界的な造園家の協会。一八九九年設立。本部はワシントン。
- *25 ASLAの公式ホームページ。 <https://www.asla.org/2010awards/173.html> 及び <https://www.asla.org/2013awards/524.html>。
- *26 ハイラインはその他、ニューヨークデザイン賞の金賞に輝くなど、様々な建築・デザインの賞を獲得している。